

助六（助六曲輪菊）

へ鐘は上野か浅草の名も懐かしき花川戸 へよしやかわせし越方を思
い出見世や清搔の音締めのお撥に招かれて 間夫が名取の草のはな

へ思い染めたる五つ所 紋日待つ日のよすがさえ 子供がたより待合の辻
占茶屋に濡れてぬる 雨の三の輪の冴え返る

へ助六さん その鉢巻は工

へこの鉢巻の御不審か

へこの鉢巻は過ぎし頃 由縁の筋の紫も 君がゆるしの色見えて 移り変わ
らぬ常磐木の へ松の刷毛先透額 堤八丁風誘う 目当ての柳花の雪傘
に積もりし山合いは 富士と筑波をかざし草 草に音せぬ塗り鼻緒 一ツ
印籠一つ前 へ急くな急きやるな アアサヨエ 浮世はナアくるま アアサヨエ
へ巡る日並の約束に まがきへ立ちて音づれも 果ては口舌のありふれた
手管に落ちて睦言の 形振りゆかし 君ゆかし

へ君なら／＼

へしんぞ命を揚巻の これ助六が前渡り 風情なりける次第なり